

作曲家安部幸明の世界

豊住 征子

はじめに

オペラのARIAは、あらずじの中で劇的連関を基に、その状況の中で機能を果たしており、それぞれの配役が歌う独唱曲である。それに対して歌曲は、詩に曲が付けられた一つの音楽形式である。男性向き・女性向き・どちらでも歌える曲が存在しており、そして歌曲の一曲一曲に舞台設定がある。私にとっては、歌曲の中の主人公になり詩と音楽の中に入り込み、様々な情景や状況を思い浮かべ自分の声で表現することが性に合っている。

大谷学会研究発表会で「作曲家安部幸明の世界」と題して彼の器楽曲「フルートとピアノのためのソナタ第一番第二楽章」と歌曲「ひとつばたご」「子もり歌」「もえるからまつ」「春よ春」を発表することにした。

1. 安部幸明の略伝

明治四四年九月一日陸軍武官の父幸二郎と母あい(どちらも徳島市出身)の二男として広島市白島町で生まれた。父の職業柄、彼は東京、下関、徳島、そして千葉県の松戸(一〇歳又は一一歳から一三歳まで)の郊外へと小学校を転校して行った。松戸にいた頃、当時の流行歌集を売るために東京からやって来たヴァイオリン奏者の後をつき回ったり、父の馬を世話する付き人からシッポの毛を七、八本ねだり、竹を用いて弓にし、家の琴を奏してヒューという弦の音に聴きほれたり、ヴァイオリンに対する憧れは相当のものであった。大正一三年東京府立第七中学入学。父のおかげでチェロの酒井梯先生に巡り合い、見事に東京音楽学校に合格。学校でチェロを平井保三、H・ウエルクマイスターに師事。昭和五年にK・プリングスハイムに師事。彼は指導を得たことで、西洋音楽の和声システムについて霧が晴れたように理解できるようになった。昭和八年卒業。すぐに研究科作曲部に入學し、再度プリングスハイムに師事。昭和九年頃始めての歌曲「時無草」を作曲。昭和一〇年「弦楽四重奏曲第一番」初演。彼の卒業作品である「オーケストラのための小組曲」は、プリングスハイム師

によって上海で初演。この年から昭和一七年まで、小田原中学の時間講師を務める。この頃から六、七年間J・ローゼンシュトック師に指揮法を師事。昭和一三年「チェロ協奏曲」ワインガルトナー賞一等賞入選。松尾みどりと結婚。八月一五日終戦。兵役から開放され戦後の混乱期が始まり、衣食住、なにもない。一年半くらいアニーパイル劇場で作曲編曲係になり「ミカド」の編曲を行っている。一年間NHK東京放送管弦楽団の指揮者。劇の伴奏音楽の作曲。当時「ラジオ歌謡」の番組があり新作歌曲を委嘱され、歌曲「かけす」を作曲する。昭和二三年～二九年まで宮内庁楽部音楽指揮者。昭和二四年地人会を平尾貴四男、高田三郎、貴島清彦らと結成し毎回作品を発表（昭和三〇年の五回まで）。昭和二八年広島エリザベト音楽短期大学の設立当初より教授を務め、広島中央放送局合唱団の指揮者を引き受ける。昭和三二年五月九日「交響曲第一番」が東京交響楽団定期演奏会で初演され毎日音楽賞、文部省芸術推奨賞を受ける。昭和三四年秋より京都市立音楽短期大学に転じる。昭和三五年一月「交響曲第二番」東京交響楽団で放送初演し芸術祭奨励賞を受ける。日本現代音楽協会会長。昭和四四年京都市立音楽短期大学が美術と合併し京都市立芸術大学となり、昭和初代音楽部長を五年間務める。昭和五二

年定年退職と同時に広島文化女子短期大学部に五年間務める。昭和六〇年一月一〇日弦楽合奏曲「ピッコラシンフォニア」広島初演。勲三等瑞宝章受章。平成四年一月八日「弦楽四重奏曲一五番」ベルリン四重奏団により初演。彼は手紙の中で「オーケストラ曲なら音色をいっぱい持っています。音量も *pp* と色々なことができます。ですが、弦の四重奏は限られた中での仕事、所謂玄人好み人の心掛ける作なのです。現存にいたるまでの最高の人は、ベートーヴェンでしょう。この人一六曲作っています。この組み合わせの創始者ハイドンは、八〇曲以上、モーツァルト三〇曲位、作曲を志す人は、殆ど作っています。ドビュッシー、ラヴェル一曲づつ、あのヴェルディ、フーゴ・ヴォルフも一曲づつ作っています。例外もあります。ワグナーにはありません。いかに重要視されているかわかりでしょう。簡単に申せば、私の一生はこの組み合わせの曲を中心にして年を重ねて来たと言えるかもしれない。だが「音楽曲の中で最も地味なものであるでしょうな。」と語っている。

現在彼は九二歳であるが、短い作品だったらまだまだ書けるエネルギーを持っておられる。

2. 彼の主要作品

(管弦楽曲) 二曲の交響曲・小組曲・セレナーデ・シンフォニエッタ・ピッコラシンフォニア・アルトサクソフオーンとオーケストラのための嬉遊曲・チェロ協奏曲・ピアノ協奏曲(室内楽曲) 一五曲の弦楽四重奏曲・二曲のフルートソナタ・九楽器のための嬉遊曲・六重奏曲・アルトサクソフオーンとピアノのための嬉遊曲・クラリネット五重奏曲(声楽作品)「安部幸明歌曲集」他(ピアノ曲) ソナチネ・やさしいこどもピアノ曲集(器楽用小品)

3. 彼の歌曲について

少年時代にヴァイオリンに憧れ続け、東京音楽学校の学生で弦楽器が友であったことから器楽作品に主に力を入れて作曲されていたことは私にはよく理解できる。一般的に日本の詩や西洋の詩というものは、穏やかでゆっくりと語られている表現が確かに多い。彼の歌曲作品の場合は、声の美しさを生かすような日本の詩を選択し、声で出来る範囲の技術を利用して、「andante」(歩く速々)「adagio」(ゆるやかに)で歌われる世界なのである。歌曲作品を手がけたのは遅い時期だったが、歌曲を最初敬遠していた理由の

一つに、旋律の下にルビを書きこむのが嫌いであったからだと彼は言っている。彼は現在も「詩と音楽の会」の会員で歌曲を作り続けている。今までの歌曲作品の数は楽器助奏付きを加えると四〇数曲ある。彼の歌曲は、自然を歌った詩が多く、例えば季節、鳥、樹木、花などの詩に作曲しており、すべて私の好む曲で、それぞれに気品があり魅力的なものばかりである。その上、その中の七曲は再度フルートやヴァイオリンの助奏を付けて厚みのある音楽になっている。彼の全歌曲作品は、歌い手の各自の声にあわせて移調しても良いので非常にありがたいと思う。彼の楽譜を見れば分かるが、外国民謡のようにピアノは歌を支えるだけの単純な伴奏ではなく、彼の歌曲はピアノと歌とが交差しあつて一つのドラマを形成しているのである。それゆえ声楽家とピアニストが努力し合体することで安部幸明の音楽に到達するのである。楽譜に書かれているすべての指示を守ることで、メロディーに乗った詩が生かされてくるのである。最後に彼の器楽作品、歌曲どちらも一生懸命に作られた作品、私達にとってすべての作品が魅了される安部幸明の音楽の世界であると思う。

〈キーワード〉ヴァイオリンへの憧れ、

K・プリングスハイム、弦楽四重奏曲